



コープリハビリテーション病院・老健あかねだより

コープリハビリテーション病院は、川崎医科大学附属病院と倉敷中央病院との連携病院です。

認知症でも地域居住者の一員 ネパールの介護実習生から学ぶこと

老健あかね 管理者 鍛本真一郎

ネパールから介護福祉士を目指すお二人の留学生在が昨年、老健あかねでの実習を終えました。お二人と懇談して高齢障害者と医療文化について考えてみました。

蛇足ですが、ネパールはエベレストを有するヒマラヤ登山口にあります。チベットと混同しがちですがチベットはネパールの北に接しています(地図)。

ネパールといえば意識の高い日本人医師がボランティア活動にたずさわり、中には「ネパールの赤ひげ」と呼ばれた先生もおられます。

来日したお二人は日本語も流暢で日本人介護士顔負けの

テキパキとしたケアを老健あかね実習で身につけてゆきました。

お二人からお話を伺って心に留めたことがあります。ネパールでは認知症(Dementia)という病名を知らない医師もいるし、まして患者として遭遇したこともない医療従事者が少なくないことです。平均寿命や高齢化率が日本と違うことは当然ですが、似たような調査報告がありました(ネパールにおける高齢者と認知症・国際保健医療、2014.12)。

では認知症の人はいないかといえそうですが、なかつたです。「変わった行動をする人」だけで「そんなものか」と地域



リハビリ入院でも認知症や精神の問題は切り離せません。写真は深夜に前後不覚になった患者様と寄り添う夜勤ナース。



前列左からラビナさん、アニザさん。後列は左から岡本看護部長、篠岡老健あかね副主任それに筆者

域が受け入れていないようです。日本の地域コミュニティはどうでしょう？ 進行を止められない老化現象(いまの認知症のお薬は気休めです)に「病名」というレッテルを貼り予防どころか早々に地域に住まわすことを拒絶してしまおうか。他の「互助」はないでしょうか。高齢者を地域在住者の一員として心身機能の変化を見定め寛容さも必要かと考えさせられました。

急性期だけで暮らしに戻れないとき

倉敷中央病院・地域医療連携部長と懇談

コープリハビリテーション病院 院長 鍛本真一郎

「病院のあるある」

昔は入院が長くなった老人の退院を家族にお願いすると「じゃあ次の病院を紹介してください」と素朴に逆提案されました。今の急性期病院は生命の危機を脱し治療・検査も必要なくなればドラドラ入院できません。一方で介護が必要になった老人を家族は低額な医療・介護保険でずっと置いてくれるところを望みます。どちらも患者自身の満足度は二の次です。

「情報の垣根をとる」

こんな現状を共有するため倉敷中央病院の総合相談・地域医療・入院支援センターの山下伸治部長と諏訪絵美さんと懇談しました。そこに同院救急科、田村暢一朗先生にも同席してもらいました。田村先生は患者の価値観に基づいた目的を共有すればリハビリやケアの満足度につながることを当院と老健あかねで研究中です。

山下部長からは情報の共有という視点で、現状の苦労話や将来展望をうかがいました。例えば「KChart」で、我々がわざわざ出向かなくても同院の診療情報を容易に収集できるようにすること、冊子形式の「医療機関マップ」を改訂し患者にとって適切な「次の病院」を選択する一助にしたことなどです。今後は入院



右奥から山下部長、田村先生、諏訪さん。左奥から筆者、笹館事務長、田辺医療福祉相談・連携室室長。撮影は当院回復期リハビリテーション病棟の山田師長。(1月22日、於・地域医療連携部別室)

支援看護師が退院後に必要な医療・リハビリの判断をして、医療ソーシャルワーカーが引き続き受け皿を選定する。それを事務がいかに統合するか、など構想されています。凡ては医療者と患者・家族との情報の垣根をとるためです。
「暮らしに戻す医療へ期待」 「地域医療連携」と称する病棟の機能分類が進んでいます。急性期と慢性期、回復期と維持期、一見合理的ですが病棟側を色分けしただけで患者側の満足度追求はまだです。そんななか、超急性期から患者・家族が納得して退院できる仕組みづくりが山田部長が粉砕身しているのがわかりました。我々も微力ながら迅速なリハビリと暮らしに戻す支援を誓いました。

入院や入所に際して、部屋代はいただいていません。

移転4年目を迎えて

四年間での 確実な変化

薬剤科は、入院・入所される患者・利用者と直接お薬についてお話しすることは以前と変わらずほとんどありません。しかし、この四年間で確実に変化してきたことが二つあります。

その一つは、病棟・相談室・外来等、他部署スタッフとの連携がうまくとれてきたことで、お薬の手配がスムーズに出来てきたことです。

二つ目は、患者・利用者の内服・外用薬も新薬ありジェネリック薬ありと多種多様なため、当院採用薬を

一人一人に合わせた 無限の介護

介護には正解がなく利用者様一人ひとりに合った対応の方法が無限にあります。上手くいった声かけの方法を他の方に実施しても通用しません。苦戦するときもありません。苦戦するときはありますが様々なアプローチの方法を考えながら行っています。上手くいった瞬間に嬉しさと介護の楽しさ、そして自分の成長を感じることが出来ます。これからの日々の関わりを大切に

定期的に見直し柔軟な対応が出来るようになってきたことです。

今後は、薬に関する新しい情報を各部署に提供し、当院スタッフまるごと、より適切な薬物治療ができるように頑張っていきたいと思います。

コープリハビリテーション病院
薬剤師 岡本 智香



回りハ病棟の師長へお薬の情報提供中 (筆者左)

して利用者様一人ひとりに合った介護を提供できるように努めていきたいと思えます。

老健あかね
介護福祉士 岡村 真子



あっ〜!あれですかね。(7階のデコナーから筆者右)

退院後の暮らしを 考えたリハビリの介入

入職してから回復期病棟で働いていましたが、一昨年は短時間通所リハビリへ異動となりました。介護保険分野は初めてだったため、分からない事も多かったのですが、短時間通所リハビリでは心身機能やADLの維持・向上を図りつつ、生活機能の維持やQOL改善を目標に介入していく必要性があると知りました。又、本人、御家族、医師、ケアマネージャー、業者、サームネージャーなど多くの職種の方と情報を共有し、連携を図って行くことが必要だ

という事を学びました。現在は、回復期病棟に戻り働いていますが、より患者様一人一人の退院後の暮らしを考えて介入するようにになりました。これからの、自分の経験を活かしてより患者様が患者様らしい生活を送れるようにしていきたいと思っています。

コープリハビリテーション病院
理学療法士 矢野 ちほ



安定した立位は生活に必須です。

満足していただける 食事の提供を目指して

移転前と比較し大きく変化したのは、温冷配膳車の導入です。以前は患者様のもとに食事が届くときには冷めていたこともありましたが、温冷配膳車により温かい食事と冷たい食事をそれぞれ適温で提供することが可能になりました。患者様・入所者様の食事アンケートでもほとんどの方に「食事の温度はちょうど良い」と答えていただいています。これからの満足していただける食事を提供できるように努めて参ります。

老健あかね
管理栄養士 市原 優衣



食事を適温で提供できる温冷配膳車

新入職員紹介



コープリハビリテーション病院
薬剤科 薬剤師
花本 早苗



○お問い合わせ先
倉敷医療生活協同組合
コープリハビリテーション病院
老人保健施設 老健あかね
TEL 086-444-3212 (代表)
受付時間 平日 9:00~16:30
土曜日 9:00~12:00
(日祝・年末年始を除く)
〒712-8057
倉敷市水島東千鳥町 1-60
ホームページ: <http://coopreha.jp/>
メールアドレス: info@coopreha.jp
広報委員会
発行責任者 笹舘 勝人

診療表					老健あかね [086-446-6541]	
コープリハビリテーション病院 外来受付時間 8:30~12:00 [086-444-3212]					訪問リハビリ	通所リハビリ
外来	装具 外来	歯科	短時間 通所 リハビリ	短期集中 健アプ 教室		
午前 9:00~ 12:30	14:30~ 15:00	午後	9:00~ 16:50	9:30~ 11:00	○	○
月			○	○	○	○
火	渡辺 (予約制)	(予約制)	○	○	○	○
水	川村		○	○	○	○
木	太田	(予約制)	○	○	○	○
金	飯塚		○	○	○	○
土				○	○	○

医療福祉相談・連携室		
相談 受付時間	平日	9:00~12:00 13:30~16:30
	土曜日	9:00~12:00
	日・祝日	休み

ヤクルト販売さんが毎年100台の車いすを社会福祉協議会へ寄贈されている活動を知り、一昨年より微力ながら協力しておりましたところ、先日「愛の車いす」として1台頂きました。車いすが日常生活に不可欠な患者・利用者の方もいらっ

しいです。新型コロナウイルス感染症が収束したら、頂いた新しい車いすで自由に外出ができるよう援助したいと思えます。本当にありがとうございます。コープリハビリテーション病院・老健あかね
看護部長 岡本 利恵

ヤクルト 愛の車いす贈呈



ヤクルト販売から贈呈された車いす (筆者左)